

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 西澤國護 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 熊谷國男（くにお） 後藤とみ子 小早健介

在間千恵 佐藤忠重（ただしげ） 朱牟田静雄（恵洲） 高橋康敏 土谷堂哉

豊田穰（ゆたか） 中川雅夫 長谷見敏（びん） 福島正明 古田昇 宮内規雄

山崎亜也 山田啓子（けい子） 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

十四点 鱒起し屋根に重石の漁師村 孤舟 （紀・く・五・健・千・恵・清・康・堂・ゆ・允・亜・け・天）

十一点 冬銀河宗谷の海へ尾を浸す 孤舟 （○そ・紀・五・恵・た・清・康・○堂・○昇・啓・け）

十点 菜に小さき蕾ありけり雑煮椀 康敏 （紀・○恵・孝・清・堂・ゆ・び・昇・○啓・○盛）

八点 ◎初句会俳句は心の葉かな 忠彦 （紀・孤・○と・千・ゆ・隆・正・天）

七点 ◎ひとこえで風邪かと問はる母の勘 とみ子 （紀・孤・恵・清・堂・び・昇）  
◎降る雪はロマンにあらず屋根見上げ 國護 （紀・孤・千・た・ゆ・○允・昇）

小兵にも五分の勝機や喧嘩独楽 昇 （紀・く・恵・清・堂・啓・亜）  
ほんのりと幸せで良しあずき粥 啓子 （そ・紀・忠・と・孝・び・正）

六点 色あせし日の丸垂るる三日かな 五郎太 （そ・紀・千・雅・正・亜）

◎終うとはなかなか言えぬ年賀状 千恵 （紀・忠・孤・健・龍・隆）  
冬籠南部の釜の湯のたぎり 國護 （そ・紀・○く・五・び・啓）

◎屠蘇を酌む夫婦揃うて百寿まで 昇 （紀・孤・○孝・龍・允・盛）  
◎浮世絵に似し人と会ふ初恵比須 盛雄 （紀・忠・○孤・恵・康・規）

五点 ◎沢庵に茶漬けの欲しき三日かな 忠彦 （紀・孤・ゆ・國・昇）

久に聞く掛声嬉し初芝居 千恵 （紀・五・康・正・け）  
付け放しのラジオは箏曲日脚伸ぶ 恵洲 （紀・規・び・天・盛）  
柚子香る山の出湯にとっぷりと ゆたか （紀・く・た・龍・規）  
竹ゆれて高き鳥声雪来るや 雅夫 （そ・紀・孤・孝・龍）

四点 寄席はねて花びら餅を手土産に 紀久男 （千・隆・け・盛）

語部の「だとさ」の民話櫓あかり 孤舟 （紀・堂・び・○正）  
振袖の乙女に囲まれ初電車 健介 （紀・た・雅・隆）

新春浅草歌舞伎にて

初芝居間 (ま) 良し声良し大向う だしげ (○紀・忠・と・啓)  
 お年玉急に神妙孫の顔 國護 (紀・雅・允・天)  
 降る雪や鈍は覚悟の在来線 びん (紀・孝・啓・天)  
 ウイーン・フィル新春の風送りくる 規雄 (紀・と・國・隆)  
 ◎雲ひとつなき青空に凧ひとつ 全 (孤・た・國・天)  
 息止めて目と目の勝負かるた取り けい子 (紀・健・正・昇)  
 ◎病む人と会へぬは淋し寒見舞い 盛雄 (紀・忠・孤・び)

三点

白鳥を金色に染め初日かな くに お (紀・規・亜)  
 ◎大旦白鷺一羽身じろがず 五郎太 (紀・孤・く)  
 苔玉に十両の実の七つ八つ 全 (紀・清・○康)  
 冬温くし消失点は画紙の外 全 (紀・孝・亜)  
 骨董はなべてがらくた初薬師 康敏 (紀・○健・亜)  
 二階より拝む山端の初日の出 ゆたか (紀・く・雅)  
 初旅や勾配緩き水郡線 亜也 (紀・康・け)  
 笑い声溢れる座敷お正月 けい子 (紀・國・隆)  
 残されし日々を悔いなく去年今年 盛雄 (紀・五・ゆ)

二点

日の出浴び鎮守に祈る孫受驗 紀久男 (た・國)  
 胃癌癒へ極月一杯酒を断つ 全 (健・と)  
 御慶交ふ楽屋見舞の綺麗所 (きれいどこ) 全 (龍・允)  
 喜々として年玉弾む夫婦かな 全 (雅・規)  
 初凧の糸に意志あり碧天へ 孤舟 (紀・千)  
 葉牡丹の一片散つて女正月 くに お (紀・盛)  
 寒梅や遠くに聞ゆ水の音 五郎太 (紀・○龍)  
 初飛行単身生活へ戻り行く 健介 (紀・○忠)  
 初富士はダイヤの煌めきの中に 千恵 (そ・紀)  
 爽やかな鳥の初声目を覚まし だしげ (國・雅)  
 炬燵の子押しくらまんじゅう教えたし 恵洲 (紀・健)  
 ◎凍豆腐吊り赤彦の湖近し 康敏 (紀・孤)  
 いろいろ端どてらに地酒背を丸め 國護 (紀・允)  
 頭より心が大事木瓜の花 正明 (紀・規)  
 朝日浴び鳥啼き交わす初詣 啓子 (紀・隆)  
 その指の冷氣貫くら・カンパネツラ 全 (紀・け)  
 キックキック音のするらし雪渡り 全 (紀・と)  
 子を抱いておしくらまんじゅう猿団子 全 (紀・五)  
 屠蘇注ぎて賜杯のいはれ子につたふ 亜也 (紀・盛)  
 胼われの指を抱えて医者に行く 天牛 (紀・啓)

一点

空爆下寒さに耐える都市の民 そらお (紀)  
 凍てる朝人見て吠ゆる犬憎し 全 (紀)

感染し自宅隔離の年始め 忠彦 (紀)  
 底冷えの朝に供へるホットケーキ とみ子 (紀)  
 孫ら去に朝寝と決めし四日かな 堂哉 (紀)  
 初場所の賞金諸手に余りけり 全 (紀)  
 香里 (かおるさと) 春待ち顔に庭木揺れ 雅夫 (紀)  
 爺ふたり渋民村の雪下ろし びん (紀)  
 ジョツガーに色目を使う辛夷の芽 正明 (紀)  
 霜柱リズムで踏みて音にのる けい子 (紀)  
 ローストビーフ孫つまみ食ひお正月 天牛 (紀)

《句評》

十四点句

鱒起し屋根に重石の漁師村

孤舟

五郎太さん・北陸の冬は時に大雪となり厳しいが、雷はブリ漁の豊漁を兆すらしい。  
 恵洲さん・鱒起こしという独特の季語に屋根に重しを乗せた漁師村の家の景色が良くマツチしている。厳しい能登の冬にひっそりと耐えている漁師村の風情。(最近鱒の産地氷見を訪れたばかりなので景色が見えます。)  
 康敏さん・強い雨の中、雷光に板葺き屋根に重しの石を乗せた漁村が浮かび上がる。今ではこんな貧しい漁村は北陸にも無いと思うが。  
 堂哉さん・寒々として人気の途絶えた景色が目には浮かびます。鱒はしゃぶしゃぶにしてもとても美味しいです。  
 ゆたかさん・雪国の家々の大雪に備えた屋根の重しですね。雪国の情景が伝わります。  
 天牛さん・海岸べりの粗末な家を彷彿とさせます。

十一句

冬銀河宗谷の海へ尾を浸す

孤舟

五郎太さん・銀河が長く尾を引き、海に消えるのを「浸す」と表現したのがいいと思います。  
 ただしげさん・北海道の冬の壮大な景色が目には浮かんできそうで、下五の表現が秀逸。  
 恵洲さん・別に小生の採らせて頂いた「菜に小さき蕾ありけり・」と対照的な大きな大きな世界。微視に対する巨視。宗谷の夜空の星はさぞかし豪勢に違いく。冬銀河に尾がある、という個人的な見方、しかもそれが北の荒海に尾をひたしているという表現、恐れ入りました。  
 康敏さん・凍てつく空に日本最北端の宗谷海峡を跨ぐ銀河。「尾を浸す」が句の注目点だが、西村和子に「海原に銀漢の尾の触れてみむ」がある。  
 堂哉さん・何とも雄大な！見たことはありませんが、懸命に景色を想像して、震えながら星空を楽しんでいます。  
 昇さん・冬の宗谷海峡の荒涼とした大景を詠まれた句ですね。素晴らしい。山口誓子の「流水や宗谷の門波荒れ止まず」の名句を想起します。  
 啓子さん・何と云っても下五の表現、瞠目致しました。

## 十点句

菜に小さき蕾ありけり雑煮椀

康敏

恵洲さん・・・雑煮の中の菜に小さな蕾があるのに気が付いた観察眼、流石！こんな微細な世界にも立派に俳句の種があることによく目を止められた。凡手には及ばない句作りと感服。

ゆたかさん・・・ふと見ると菜の蕾を見つけた喜びが伝わります。

堂哉さん・・・椀の中で小さな発見は嬉しいです！いただく前のおしゃべりが聞こえてきます。

啓子さん・・・元日の雑煮椀の中の青物に小さな蕾があることに眼をとめ、その彩までもくつきりと描き出して俳句に仕立てられる技量、穏やかな希望を含んだご家庭でのお正月の景がこれで充分に描かれているように感じて感動致しました。

盛雄さん・・・正月の静かな朝餉の雰囲気が充分に伝わる佳句。

## 八点句

◎初句会俳句は心の薬かな

忠彦

孤舟さん・・・俳句に勤しむことは百薬の長。

とみ子さん・・・私も俳句に助けられています。心の薬が良いです。

ゆたかさん・・・俳句を心の薬と捕らえた感覚が絶妙です。

隆さん・・・改めて俳句を心の薬と思う年始め。「俳句でも始めませんか」という医師がいてもよさそう。

天牛さん・・・一寸理くつぽいですが、薬とはうまいですね。

## 七点句

◎ひとこえで風邪かと問はる母の勤

とみ子

孤舟さん・・・母親にとって、いつまで経っても子供は子供。全てお見通し。

ただ、中七（問はる）が歴史的仮名遣いなので、（ひとこえ）は（ひとこゑ）としましょう。

恵洲さん・・・子供時代の思い出か、齢を取られた現在のご母堂か、いずれにせよ、子を思う母の気持ちはいくつになっても変わらない。その有難さ。

堂哉さん・・・母の句ですね！何度も凶星をつかれたものです。

◎降る雪はロマンにあらず屋根見上げ

國護

孤舟さん・・・純白の雪は神からの贈り物でありがたいが、屋根の雪卸し他たいへんな作業を強いられることになる。

ただしげさん・・・雪国で生活する人の雪に対する感覚をうまく表現している。

ゆたかさん・・・雪国にとって雪はロマンどころか災難ですね。

允章さん・・・雪深い地域に住む人びとの雪下ろしの作業は大変な労働で特に年寄りにとっては命懸けの作業です。ただ屋根を見上げて嘆息するばかり。

小兵にも五分の勝機や喧嘩独楽

昇

恵洲さん・・・相撲の句か？と思わせて、実は喧嘩ゴマの句、という一種のどんでん返し感が面白い。

くにおさん・・・喧嘩独楽（小兵力士）の勝気がよく出ていると思います。

堂哉さん・・・子供の頃「ばい」と呼んでいた金属製の小さな独楽で遊びました。上手くゆくと相手の独楽を見事に弾き飛ばしていました。

亜也さん・・・相撲に見立てた楽しさ。

ほんのりと幸せで良しあずき粥

啓子

忠彦さん・・・あずき粥は、私も大好きです。「ほんのり」は粥の甘さと幸せにピッタリです。とみ子さん・・・小豆の紅い色がほのぼのとした気分にさせてくれます。

紀久男・・・甘辛両刀使いですが、あずき粥を食べたことはありません。あずき粥で常温の酒を呑んでみたくなりました。

六点句

色あせし日の丸垂るる三日かな

五郎太

亜也さん・・・旗日に旗を出す家も少なくなり…。そもそも戸建ては主がどこも高齢で。

◎終うとはなかなか言えぬ年賀状

千恵

孤舟さん・・・私は今年「年賀状廃止宣言」をした。しかしやはり寂しいもの。

忠彦さん・・・私もそうです。来年は実行します。

龍平さん・・・実際仲々な難事。一度終って復活させた輩が居た

隆さん・・・名案が浮かばず、次の賀状の季節を迎える。でも、近年では失礼でなくなった

ことだけは確かである。

冬籠南部の釜の湯のたぎり

國護

くにおさん・・・南部の釜が効いて「湯の滾り」に静寂の極みを感じます。

◎屠蘇を酌む夫婦揃うて百寿まで

昇

孤舟さん・・・男女とも平均寿命が百歳になるのも夢ではない。

孝岳さん・・・和やかな家庭生活が窺えて気持ち暖かくなる。「百寿まで」が良いです。

盛雄さん・・・人生、晴れの日ばかりでは無かった。心意気が素晴らしい作品です。青葉会の

皆さん、あやかりましょう。

◎浮世絵に似し人と会ふ初恵比須

盛雄

孤舟さん・・・大勢の参詣客の中に、思いがけず瓜実顔で日本髪・和服姿の浮世絵美人を発見。

忠彦さん・・・新年早々面白い経験されて、ちよつと可笑しくなる句ですね。

恵洲さん・・・関西の味の句ですね。東京ではあまり聞かない、古風な正月行事に、浮世絵か

ら抜け出してきたような、(多分)和装の美人は良く似合います。

康敏さん・・・えべっさんは大阪が盛んだ。人混みの中に浮世絵から抜け出たような美人：思

わず振り返る。尚、池田俊二著『日本語を知らない俳人たち』(国語研究所)に

て、「似し人」は誤り、文法的に「似たる人」が正しいと論じられている。

五点句

◎沢庵に茶漬けの欲しき三日かな

忠彦

孤舟さん・・・お節料理は元日・二日で堪能した。三日はあつさりした沢庵と茶漬けで十分。

ゆたかさん・・・正月の祝い酒にご馳走が続くとさっぱりしたもの欲しくなりますね

久に聞く掛声嬉し初芝居

千恵

康敏さん・・・歌舞伎座では、一般席からの掛け声は依然禁止だが、四階の亚克力板に囲ま

れた席からマスクした関係者が掛け声をするようになった。観劇の雰囲気か

戻ってきた。

紀久男・・・浅草新春歌舞伎を総見した折、私が久し振りに大向う披露した折の句。皆さま

に喜ばれて一安心しました。

付け放しのラジオは箏曲日脚伸ぶ

恵洲

びんさん・・・説明がちよつと過剰かと思えます。「日脚伸ぶおやどこからか箏の音の」とで

も如何？

天牛さん・・・いかにも正月ののんびりした雰囲気ですね!!

柚子香る山の出湯にどつぷりと

ゆたか

ただしげさん・・・日頃の疲れが吹っ飛びそうな句で、うらやましい気分

竹ゆれて高き鳥声雪来るや

雅夫

紀久男・・・雪模様のベランダに鶉（ひたき）、啄木鳥、鶉（つぐみ）等が来て賑います。

## 四点句

寄席はねて花びら餅を手土産に

紀久男

隆さん・・・老舗の和菓子屋で「花びら餅」を買った。恥かしながら初めてこの菓子を知った。正月気分を大いに味わった。

盛雄さん・・・作者のゆとりですな。一人遊びに小さな負い目が見え隠れしている。

紀久男（自解）・小生「助六」出演の折、いつも撒き物に使っている神田「さゝま」の最中は高名ですが、ここの花びら餅は最高です。皆さまにお薦めです。

語部の「だとさ」の民話椿あかり

孤舟

堂哉さん・・・中七に感心しました！又、季語が抜群です！

正明さん・・・勸善懲悪が多い民話、お終いは、「だからそんな事やってはいけないのだとさ」という事でしょう。民話だけで無く、世界はやってはいけない事をする事件が多発しています。今年こそは平和な一年でありたいものですね。

振袖の乙女に囲まれ初電車

健介

ただしげさん・華やいだ新年の情景が浮かんできて、楽しい。

隆さん・・・正月に華やかな振袖姿はよく似合う。消えないで欲しい光景

新春浅草歌舞伎にて

初芝居間（ま） 良し声良し大向う

ただしげ

忠彦さん・・・新年の若手の歌舞伎。張り切っている様子が伺われます。

とみ子さん・・・具体的な説明（間良し声良し）が、よかったです。

紀久男・・・未だ解禁されていない掛け声を決めて気分よかったです。小屋の係員が注意するゼスチャーをしておりました。

お年玉急に神妙孫の顔

國護

天牛さん・・・孫をもつてみないとわかりません。その通りです。

降る雪や鈍は覚悟の在来線

びん

天牛さん・・・山陰線もそうでしたが、日本海沿岸を走る汽車を思い出しました。東海岸の人にはわかりにくいでしょうね。

紀久男・・・忠彦さんと青森のストーブ列車（五能線）の旅を楽しみにしております。

鳥賊を炙って地酒を呑みたいものです。

ウイーン・フィル新春の風送りくる

規雄

とみ子さん・・・ニューイアーコンサートを観るとお正月らしい気分になりますね。

隆さん・・・ニュー・イアー・コンサートは新年を飾る恒例行事。「風送りくる」が気になる。「ウイーンから青きドナウや年始め」でいかがでしょうか。

◎雲ひとつなき青空に凧ひとつ

規雄

孤舟さん・・・風に身を任せる凧はひたすら高みへと。

ただしげさん・正月の風物詩であった凧あげが少なくなった今、凧一つでも正月らしくて楽しそう。

天牛さん・・・仲々の俳人ですね。

◎病む人と会へぬは淋し寒見舞い

盛雄

孤舟さん・・・コロナ渦でお見舞いの面会はご法度。残るは郵便でのご機嫌伺いのみ。  
ただ、一句内で現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの併用は避ける。  
寒見舞い ↓ 寒見舞 または 寒見舞ひとすることで解決します。  
忠彦さん・・・コロナに感染し自宅療養が10日間ありましたので、実感！ 自室に閉じこもっているのです、同居の小一の孫がドア越しに毎日挨拶してくれるのでうれしいやら、淋しいやら・・・。

三点句

白鳥を金色に染め初日かな

くにお

亜也さん・・・早起きしなければ目にし得ぬ美。

紀久男・・・新潟の湖で白鳥の餌撒き等お世話されている くにおさんにご案内され、凍てつく寒さの中、白鳥が啼き交わし家族単位で次々飛翔する様子は、この上なく素晴らしい光景で忘れ得ません。

五郎太

◎大旦白鷺一羽身じろがず

孤舟さん・・・正月の白鷺は鶴にも似た威厳とお目出度さが感じられる。

五郎太

苔玉に十両の実の七つ八つ

康敏さん・・・十両の盆栽、根元の苔玉に落ちた赤い実、色の取り合わせが美しい。

五郎太

冬温くし消失点は画紙の外

亜也さん・・・透視図法を持ち込んだ発想を買うも、上五の必然性は？

康敏

骨董はなべてがらくた初薬師

亜也さん・・・詣でたついでにそぞろ歩き。「なべて」の措辞が古風で好ましい。

健介さん・・・初薬師と言う神妙な場面で、骨董なんてがらくた、と切り捨てたところが痛快。

初旅や勾配緩き水郡線

亜也

康敏さん・・・水戸から久慈川溪谷を通り郡山へ向かう水郡線。袋田の滝は凍て付いたことだろう。

紀久男・・・かつて允章さん等と共に水郡線を使って旅した事あります（袋田温泉泊）。

車内から梅見満喫しました。

けい子

笑い声溢れる座敷お正月

隆さん・・・子供の頃の正月は、父が親戚の家に年始回りに連れていってくれた。親戚との笑い声は正月気分を盛り上げた。「核家族」へ片寄った日本の正月に笑い声はめっきり減った。

盛雄

残されし日々を悔いなく去年今年

ゆたかさん・・・全く同感です

二点

日の出浴び鎮守に祈る孫受験

紀久男

ただしげさん・・・孫の受験、新年の鎮守様へのお願い、よく分ります。

胃癌癒へ極月一杯酒を断つ

紀久男

とみ子さん・・・「快気されて何よりです。一ヶ月禁酒は本当でしょうか。」

※孤舟さん・・・作者の「癒へ」送り仮名は「癒え」。よく見かける間違いです。

御慶交ふ楽屋見舞の綺麗所（きれいどころ） 紀久男

龍平さん・・・何と言うエレガンス！ 場所が場所 美女数多。

紀久男（自解）・・・高島田の新橋芸者はじめ着飾った女性群に圧倒されます。ご祝儀袋が飛び

交います。

### 葉牡丹の一片散つて女正月

くにお

盛雄さん・・・ベテランの手による繊細な佳句。

紀久男・・・ベテランのくにおさんが季重りを承知で敢えて詠まれた句でしょう。

※ただしげさん・・・残念ながら葉牡丹、女正月の季語重なりと思われ採れませんでした。

### 寒梅や遠くに聞ゆ水の音

五郎太

龍平さん・・・見事な早咲き梅 遠い水音が春を告げて咲かせたか。何気ない自然の営為

見事です！

※孤舟さん・・・「聞こゆ」は水にかかるので「聞こゆる」と連体形にし、

遠くに聞ゆ ↓ 遠く聞こゆる と整えられます。

### 初飛行单身生活へ戻り行く

健介

忠彦さん・・・私も経験しております。飛行機の中で心の切り替えや新年の挨拶廻りなどを

考えたものです。この題材を思い付くとは素晴らしいです。

### ◎凍豆腐吊り赤彦の湖近し

康敏

孤舟さん・・・信州・諏訪地方の厳寒の頃の風景。

康敏さん（自解）・・・「赤彦の湖」は諏訪湖です。諏訪出身の島木赤彦は「みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ」など、諏訪湖を詠んだ歌を沢山残しています。諏訪盆地の冬は寒く、家々の軒先に藁で数個ずつ豆腐を連ねて吊るし、凍豆腐を造っています。実は戦時中、上諏訪に疎開していました。その高島国民学校の校長は赤彦の弟でした。赤彦も元は小学教師です。最後の校長さんのことを云いたくて・・・。

### いろり端どてらに地酒背を丸め

國護

紀久男さん・・・季重りですが敢えて採りました。小生風呂上りはいつもどてら着て晩酌です。

※康敏さん・・・「いろり」と「どてら」の季重なり。それに内容を詰め込み過ぎていると思います。

### 朝日浴び鳥啼き交わす初詣

啓子

（他にも季重なりが三句程ありますが、主季語がはつきりしているので指摘しませんでした。）  
隆さん・・・鳥にとっても新年が始まると考える思いやり。 「朝日浴び」を除き

「鳥啼くや空にも鳥の初詣」でもよさそう。

### キックキック音のするらし雪渡り

啓子

とみ子さん・・・キックキックの音から賢治の童話へと誘ってくれるのが おもしろいです。

### 屠蘇注ぎて賜杯のいはれ子につたふ

亜也

盛雄さん・・・物知り父さんのご機嫌なお顔が目には浮かぶ、楽しい佳作。

### 胼われの指を抱えて医者に行く

天牛

啓子さん・・・今年の冬は特に寒く、ケアが大事と気づかされます。

### 一点

### 底冷えの朝に供へるホットケーキ

とみ子

紀久男・・・亡きご主人（保明さん）は甘党でしたから喜んでおられると思います。

### 孫ら去に朝寝と決めし四日かな

堂哉

紀久男・・・倅一家、娘一家が来てお年玉を弾んだり、嬉しいながら少々疲れた気分が伝わる句です。





## 【次回青葉会予定】

令和五年二月二十三日（木） 天皇誕生日 時間：十三時～十六時半

会場：三軒茶屋 しやれなあと（世田谷区施設） 4階会議室

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。

今回から、初句会で実行したように清記を事前にPCにて入力し、**句会当日には、入力原稿の確認後、すぐに選句にかかれるよう句会の段取りを変更してみたいと存じます。従って、句会日に先立ち、参加者の出句予定句及び投句を当方に頂戴したく存じます。**

**締切：二月二十一日（火）中。**

出句・投句は今井宛FAX、或いは星田メール或いはFAX（03-3421-9772）宛頂戴できれば事前に清記に反映致します。

尚、当日ご出席の方で、しやれなあどの場所が初めてのかたは、星田までお電話を頂戴出来ればご説明致します。田園都市線三軒茶屋の駅出口は北口左階段ですが、そこからお電話いただければお迎えに上がります。遠慮なくお申し越しくくださいませ。

☆三茶しやれなあと所在地 東京都世田谷区太子堂 2-16-7 宝くじ売り場が目印のビル

☆星田携帯電話 080-8870-8201

※※※※※※※※

## 青葉会報

一、冬晴の午後、孤舟選者の娘さんお住居のマンションの集会場、コミュニティプラザをお借りして二度目となる句会に選者ら5名が出席。コロナ罹患、お怪我、ご法事等々それぞれのご用事で欠席の方を含め8名の投句全10句が集まりました。5名の清記にやや苦労があるかと、事前にすべての句を啓子さんが入力して打ち出した一覧表を句会冒頭に配布、選句からの句会となりました。やや寂しいとはいえ、充分に選句及び五郎太さんの披講に充分に時間を取ることが出来、ゆつくりと鑑賞し感想を述べ合い、文法的な問題点なども気になる点を確認する時間ともなり有意義な句会となりました。啓子さん寄贈の「加賀鳶」とおつまみを賞味しながら浅草新春歌舞伎総見のことなど話題に上りました。ご覧のように、佳句が多く選句に苦勞された方も多かった初句会でしたが、この場でも話題となった孤舟選者、康敏さんの句が高得点でした。蛇足ですが、小生は方向音痴で、集合場所の JR 五反田駅で出口を間違え皆さまにご迷惑おかけしたことをお詫び申し上げます。

## 二、関係者近詠

アカペラで墓前礼拝天高し	眞希子	北総の大地を時雨一直線	陽亮
せつちちな友の干柿甘乾き	全	本流を逸れて歩みし夜の寒さ	全
野良といふ犬消えし街猫じやらし	全	熟柿啜ればやたら涙の出る夕べ	全
表彰はさらさら進む仏手柑	弘子	血圧とふ難物抱へ冬迎ふ	全
柳川の風うすうすと返り花	全	諾へぬ菊を膾にする野蛮	全
晩秋の柳川下り夫婦舟	全	立冬に新團十郎の初日かな	紀久男
群れ立ちて冬の雀となりゆけり	全	成田山奉納歌舞伎	
		海老蔵に喝！鬘肩やめようか夜寒道	全

顔見世の大向ふなる十寸見會（ますみ会） 全

（註）河東節の会員。老舗の旦那衆中心。

横澤放川選

「森の座」

2月号

数へ日の遅々と進まぬ身の整理

盛雄

数へ日の新調畳の青さかな

健介

数へ日の少年少女塾通い

全

書初めや太子唱へる「和」の一字

全

願い事ひとつに絞り初恵比寿

全

晩酌に鮎（ほっけ）の干物丸齧り

紀久男

さりげなく安否問ふ子や年の夜

全

胃癌癒え極月一杯酒を断つ

全

極月や歯医者褒めをる二十本

全

きさらぎ会

12月・1月号

ひっそりと息することし寒牡丹

允章

休肝日鍋焼きうどんで済ませけり

全

ロウソクの火の温かき聖夜かな

規雄

※五俳句「添削コーナー」（選者：井上弘美）に取り上げられ、12月2日に放送されました。

### 三、孤舟選者近詠

上州の風に締まりし懸大根

木も草も日毎に寡黙冬ざるる

鋤焼は家族の丸くなるところ

一握りほどの陽だまりひめつばき

消しゴムで消せぬ来し方冬銀河

令和五年二月九日

今井紀久男 記